和田英道先生を悼む

元学長　山崎一穎

教職員を代表して和田英道先生にお別れの詞を申し上げます。一九七六年、中島悦二先生の後任として、国文学研究資料館助手であった先生を国文学科へお迎えいたしました。爾来先生は中世文学の研究と教育と大学運営とに全力を傾倒されました。今年一月十七日、五十二歳の先生とお別れすることになったのは、痛恨の極みです。

先生は教場での学生指導のみならず、軟式野球部の顧問として学生の指導にあたられ、また学生部次長、事務局長、学園理事、評議員として大学運営に尽力されました。さらに私大連盟の学術研究体制検討委員会委員として、「明日への提言―私立大学における学術研究体制」という冊子への共同執筆など忘れられないお仕事です。

学長就任後は、留学制度の確立をめざし、学生達へ海外語学研修の道を拓き、学園内の協力体制に努め、校友会後援会との連繋にも心を配られました。長い間ありがとうございました。

先生の訃報に接して以来、先生が何故中世文学を専攻なさったのか、その事を考えておりました。この度大学二年生の時母上を亡くされ、自らも肝臓を病みという経歴を知り、先生の人生観が中世文学に流れる無

常観と呼応したことに思い至りました。先生の学問は自らの身体から発した内発性にあることを知り、思いを新たに致しております。

私は今『平家物語』の平知盛を思い起しております。寿永四年壇の浦の戦いに敗れた時、知盛は「見るべき程の事は見つ」と言い残して果てます。「見るべき程の事は見つ」と言い切るにはあまりに早い先生の死を無念に思い、残念に思い、そして不条理な死に戸惑いを感じております。しかし、先生は最後に延命治療を拒否されたと聞いております。死に対する覚悟、あるいは天命を悟っておられた先生には「見るべき程の事は見つ」という心境であったろうと思っております。お穏やかなその最期のお顔がその事を物語っております。ご両親の許へ旅立たれた先生の御魂の安らかならんことを祈念しつつ、お別れの詞といたします。